

保存の はなしをしよう。

28 休館だから できること

昨年12月から4月まで、当館は休館しています。長い間、展示をご覧いただくこともできず冬眠しているように見えるかもしれませんが、中ではいつもより忙しく動いています。開館から30年もたてば、修理するところや新しくするところが次々に出てきます。2020（令和2）年には、展示室の照明をLEDに替えましたが、今回はエレベーターを交換しています。

当館には一般用エレベーター以外に、裏方には作品用の大型エレベーター、1階ホワイエから2階ホワイエをつなぐシースルーエレベーターがあります。シースルーエレベーターは、来館された方はよく目にしていらっしゃるかと思いますが。人を運ぶ実用的な機能だけでなく、ガラスで覆われ、機械が動く様子が見える「近代＝モダン」を象徴する印象的なデザインです。建築と同じく黒川紀章の設計で、近代美術館である当館のキャラクターを表現するものでした。どのようにその考えを受け継



裏を見ることができました。



修復家の調査とメンテナンスを待っています。

ぐことができるか、話し合いを重ねて、現在改修作業がおこなわれています。

解体作業は、大工事です。いつもホワイエには大きな作品を展示していますが、工事のあいだに何らかの事故があつてはなりません。それで昨年末に全ての作品を移動しました。そのなかでも最も大きな作品、フランク・ステラの《ラッカ III》は、縦304cm、横760cmもあります。館蔵作品では屋外に展示している彫刻、ケネス・スネルソン《着地》（高さ250×1000×360cm）に次ぐ大きさです。それが1階展示室入口の上にかかっているのですから、どうやって降ろそうか、担当の作業員があらかじめ調査して手順が提案されました。

降ろしてはじめて、私はこの作品の裏を見ることができました。綿キャンバスなので、よほどシミが出ているかと思いましたが意外にきれいで、埃も覚悟していたほどはついていません。大きな作品であり、展示されていたホワイエは館内でも気温の変化が大きいところであるため、構造に無理が出ているかと思いましたが、それも目立つほどではありません。この作品は、ただいま展示室の中にいます。薄い和紙をかけて、壁に固定しています。

なぜ、これほど状態が安定しているのかを考えると、ひとつには、展示・撤去を繰り返さず、ずっと同じ状態であったこと、周囲の環境が埃も少なく、比較的清潔であったことが挙げられるでしょう。この機会に修復家を招き、高いところにあつたときにはできなかった作品の精確な状態調査とメンテナンスをおこないます。（植野比佐見）

メールマガジン Facebook X (旧 Twitter) ご案内

メールマガジンでは展示会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や X (旧 Twitter) でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展示会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展示会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引



入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当：中川

エレベーターの改修工事を実施しています。

現在、当館は館内のエレベーター全機の改修工事を実施しています。その工事と、工事に関わる区画の作品や備品の移動、また開催していた展示会の片付けと次の展示会の展示作業のために、2023（令和5）年12月25日（月）から2024（令和6）年4月26日（金）にかけて、全館休館をしています。

工事の対象には、建物内で目をひくガラス張りのシースルーエレベーターや、作品などを運ぶための大型エレベーターも含まれます。特にご来館の方にご利用いただくエレベーターに関しては、基本的に「油圧式」であった機構を、現在一般的となっている「ロープ式」に転換するというものです。

言葉では単純ですが、元々建物の構造が油圧式で設計されているため、機構の異なるロープ式に転換するには、多くの困難がともないます。またエレベーターも、建築設計を担当した黒川紀章の意匠によるため、それを引き継ぐ必要もあります。

多くの方と協議のうえで定めた方針にもとづき、工事は現在進行中です。次の開館は本年4月27日（土）の予定です。1994（平成6）年の開館以来、30年にわたって美術館活動の一部を支えてきたエレベーターには感謝をしつつ、新年度には新しいエレベーターでみなさまをお迎えいたします。



シースルーエレベーター
1階乗降口
*撮影：長岡浩司

下左：
シースルーエレベーター
*撮影：長岡浩司

下右：
ガラス取り外し作業後の様子



MOMA Wakayama

news

2024 n°118



原勝四郎《青シャツ》1938年 大阪中之島美術館蔵
「原勝四郎展 南海の光を描く」より



図1 第1章展示風景



図2 第2章展示風景



図3 第3章展示風景



図4 第4章展示風景

つながり、つなげる 51年ぶりの大回顧展 原勝四郎展：和歌山県立近代美術館での開催をめぐって

原勝四郎展 南海の光を描く 2023年10月7日(土)－12月3日(日) 和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館

はじめに

「原勝四郎展 南海の光を描く」は、現在の和歌山県田辺市に生まれた画家、原勝四郎(1886-1964)の生涯をたどる、半世紀ぶりの大回顧展として、2023(令和5)年10月から12月にかけて、和歌山県立近代美術館(和歌山会場)と田辺市立美術館(田辺会場)の2館が共同で開催しました。

当館では原の作品をコレクション展などでたびたび紹介していますし、なにより1996(平成8)年に開館した田辺市立美術館は、同市に生まれた原を活動の軸になる作家のひとりと位置づけ、展示や作品収集に力を入れてきました。同館では1997(平成9)年と2011(平成23)年に回顧展を開催して図録も発行しており、さまざまなテーマを設けてその作品を紹介してきました。今回の回顧展も、同館の地道な調査研究活動に負うところが大きかったことは、まず記しておかねばなりません。

しかし両会場合わせて、原の作品だけで159点を集めた規模の展覧会は、和歌山県内では1972(昭和47)年に当館で開催した「原勝四郎展 その自己表現の軌跡」以降なく、全国的にもその翌年に神奈川県立近代美術館で開催された「原勝四郎展」以来、50年ぶりの機会でした。さらに本展は、原が田辺で交流を持った画家の作品も一緒に紹介するこれまでにない構成としました。

今回両館の蓄積した情報を総合し、新たな調査も行いながら、作品について再検討することで、画家の全体像を改めて提示することができたのは大きな成果です。それは、田辺市や白浜町を中心とする、地域の美術活動を明らかにするだけでなく、明治時代末から大正時代にかけて、東京やフランスにも滞在した原が、それぞれの地で交流を持った美術家とのつながりなど、今後より大きな視点で和歌山県の画家の活動を位置づける土台ともなるはずです。詳しくは本展の図録をぜひご覧ください。

和歌山会場の展示

さて、今回展覧会を2館で開催することによって、より大きな規模で原の作品を紹介できたのですが、実際に各会場で行われたことがのちに見えていくことが心配されました。そのため、本号では会場ごとの展示意図や、そこで行われたイベントなどについて、両館の担当者が記すことにしました。

まず和歌山会場は、原の活動全体を、各年代の主要な作品を集めて紹介するという、回顧展の第一の目的を果たす場としました。その生涯を3つに分け、第1章では、画家を志して田辺から上京、さらにフランスへと赴きながら、絵画の学習がうまくいかず帰郷した30代半ばまでの活動を、田辺中学校時代に指導を受けた画家、田中寅三(1878-1961)の作品とともに紹介しました(図1)。

続く第2章では、田辺で自らの画風を見出し、さらに結婚、娘が生まれてすぐに白浜に移住してから、力強い作風を展開させた40代から50代にかけて、戦前の充実した制作をたどりました(図2)。そして第3章は、終戦後、昭和南海地震に被災しながらも制作を再開し、風景や人物に新たなテーマを見出しながら、白浜の風土に沿って明るく穏やかな作品を描き続けた、60代から78歳で亡くなるまでの作品により構成しました(図3)。

合わせて、原を語るには欠かせないバラを中心とする静物画の小品と、原のなかで「日本画」と分類される淡彩や墨を用いた主に軸装形式の作品、また数多く残された水彩による植物スケッチをまとめて紹介する第4章も設けました(図4)。当館では4章を合計して、原の作品を130点、田中の作品を7点展示しました。

ひとつの会場に作品を年代順に並べることで、表現の展開はもちろん分かりやすく提示できたのですが、展示室で順に作品を見ていくことで感じ



図5 トークイベントの様子



図7 「言葉」で感じる美術館の様子

られたのは、原が田辺や白浜の地で、妻と子とともに暮らした時間です。原は目の前に広がる海辺の風景を中心としつつ、人物像では自分自身と妻と子、つまり身近な家族の肖像のみを繰り返し描きました。同時にバラなどの静物画も描き続けますが、原がおよそ40歳で田辺から白浜に移住した頃より78歳で亡くなるまで、作品には生活を営んだ場所と、そこで年齢を重ねていく原夫妻、そして成長する娘の姿が順に表されます。

原一家にはもちろん大変な苦労があったのですが、海辺で暮らしたある家族の歴史は、原の描く明るい紀南の風景と相まって、見る人それぞれの記憶とも重なりながらノスタルジーを誘います。個々の作品の魅力はこれまでにも紹介してきましたが、心に響くこうした感覚は、その生涯を通して作品を展示することではじめて提示できたと思います。時に美術の価値基準となる表現の新しさや独自性だけでは測ることのできない、ずっとそこに身をおいていitくなるような心地よい空間が展示室には広がりました。

つながり、つなげる

当館にも田辺市立美術館にも、当館や神奈川県立近代美術館における半世紀前の大規模な回顧展を実際に見た者はいません。しかし幸いなことに、1972(昭和47)年の展覧会を担当した、当館の初代学芸員である酒井哲朗さん(現、福島県立美術館名誉館長)からは、当時の話をうかがうことができ、また残してくださった調査資料やご執筆の文章は、展示構成を考える上でも非常に助けられました。

1972年と言えば、原が亡くなってまだ8年後です。原本人をご存知の方も多く、なにより妻の厚子さんがご健在であったため、当然生の情報が多く残っていました。酒井さんが厚子さんとともに所蔵家の元を回り、記録された情報は、今では得ることができない貴重なものです。会期中、11月3日(祝・金)には、当館に酒井さんをお迎えし、今回の担当学芸員2名が当時のことや、原の芸術についてお話をうかがうトークイベントを、「原勝四郎展をめぐる邂逅」と題して実施しました(図5)。

当時酒井さんがまとめられた作品の調査カード(図6)には、B6サイズ程度の大きさに切り揃えられた厚紙に、作品の写真が貼り付けられ、制作年やサイズ、所在といった情報が書き込まれています。酒井さんによると1972年は当館が開館してまだ3年目でもあり、展覧会の準備作業も手探

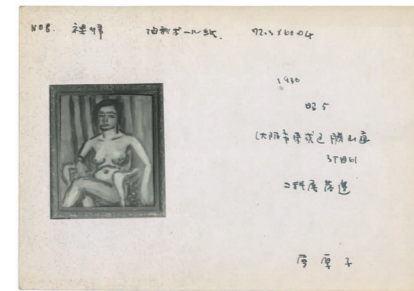


図6 原勝四郎《裸婦》調査カード(当該作品は、1995年に原厚子氏より当館へ寄贈)



図8 原勝四郎《海岸風景》1938年 大阪中之島美術館蔵

りを進めていた時期であったというお話でした。この後、調査カードは他館の形式も参考にしながら整えられることになります。

いまでは行方が分からなくなってしまった作品もありますが、調査カードから所在をたどり、はじめて、あるいは51年ぶりに紹介できた重要な作品もあります。「原勝四郎展をめぐる邂逅」というタイトルには、今回の回顧展を通して前回の展覧会とめぐり会った私たちが、多くの遺産を引き継いで、さらにこの先につなげていきたいという想いも込めました。

また会期中、10月14日(土)と15日(日)には、目の見えない人と見える人が、一緒に美術作品を鑑賞する取り組み、「言葉」で感じる美術館 視覚障害者をつくる美術鑑賞プログラム」を、本展を会場にして実施しました*(図7)。原の作品は、対象を大胆に簡略化して表現しているがゆえに、例えば《海岸風景》(1938年、大阪中之島美術館蔵)(図8)のイメージから、「家の上に大きなキノコが生えているみたい」などといった不思議な言葉を、見える人に数多く誘発しました。そういった言葉は、見えない人にとっては大きく想像を広げるきっかけとなり、結果として原の絵をととても豊かに一緒に鑑賞することができました。

原の作品にそういった力があることは、このプログラムを通してはじめて分かったことです。ご参加いただいたみなさまにはもちろん、ファシリテーターおよびコーディネーターを務められた、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」のスタッフのみなさま、実施、運営に尽力された公益財団法人 和歌山県人権啓発センターのみなさまには改めて感謝を申し上げます。自らの作品の可能性が広がることに、原勝四郎もきっと喜んでいるはずです。(宮本久宣)

* 「言葉」で感じる美術館～視覚障害者をつくる美術鑑賞～
鑑賞ツアー：2023年10月14日(土)、トークセッション：同15日(日)
主催：和歌山県、公益財団法人 和歌山県人権啓発センター
協力・会場：和歌山県立近代美術館
ファシリテート・コーディネート：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ



図1 小品の展示



図2 交流した画家たちの展示



図3 「田辺詩話会」資料の展示



図4 マップの配布(田辺会場)



図5 網不知の風景

地域とのつながりとともに

原勝四郎展： 田辺市立美術館での開催をめぐって

田辺会場の展示

今回の「原勝四郎展 南海の光を描く」は、現時点でうかがい知ることのできる原勝四郎の画業の全貌を網羅するもので、田辺でともに活動した画家たちについても踏み込んで紹介しました。「半世紀ぶりの大回顧展」と銘打って実施するのにふさわしい内容であったと思います。原の生まれ故郷であり、生涯のほとんどを過ごした地にある田辺市立美術館(田辺会場)では、制作の中心となった当地の風景や、バラを主とした静物、娘をモデルにした人物像などの小品を展示して、親しみのある芸術家としての原勝四郎を伝えることをひとつの目的としました(図1)。

当館が1996(平成8)年に開館する以前から、田辺周辺の地域では原の芸術を愛好する人々が小品の類を持ち寄って展覧会を開いたり、それらの作品を交換しあったりということが続いていました。そうした土壌の中で、「原勝」や「原勝ちゃん」といったニックネームで呼ばれたりするほど、地元では最もなじみのある画家のひとりとなっていました。徐々に若い世代にとっては遠い存在になりつつあるようにも感じていました。原の作品や業績を継承してゆく役割が美術館に移り、新たなアピールの仕方を考えてゆかなければならないときにあって、本展の開催は時宜を得たものでした。

日本の近代を生きたひとりの芸術家としての原の姿を、和歌山県立近代美術館(和歌山会場)で示しつつ、郷里にある当館では等身大ともいべき原の姿を見せることは、規模も立地条件も違うふたつの美術館がひとつの展覧会を催すにあたって案出した方法でしたが、結果としてこの画家のことを伝えるには好適な手段であったと思います。

当館では加えて、原とともに戦前の田辺で「無名社」と称するグループを結成して美術活動を行った画家たちについても取り上げ、当地における原の存在を周囲との関わりの中でうかがうことも意図しました(図2)。紹介し

たのは、原が画家を志すきっかけを作り、自身が亡くなるまでその活動を支援した兄の原保吉(1880-1949)、またそれぞれ東京美術学校に進学した弟の原愛造(1891-1964)、楠本秀男(1888-1961)、三栖敏雄(1892-1964)の4人です。

また、当時は美術家たちだけでなく、文芸や音楽に携わる人々も互いに深く交流して当地の新しい文化を興していこうとする機運が高まっていました。そのことを伝える資料として、原が表紙や扉の絵を提供した、文芸家たちのグループ「田辺詩話会」の刊行物も出陳しました(図3)。同人誌『雲と石と人間』創刊号(1927年)の表紙には原の自画像が掲載され、本文には当時京都の日本画壇で活躍していた田辺市巾辺路町出身の画家、野長瀬晩花の詩や、後に原と結婚する竹中厚子の詩が収録されていて、芸術を志す人々の交流のさまが浮かび上がってきます。当館では原の作品を29点、交流した画家の作品を12点、資料を3点(うち『雲と石と人間』創刊号は追加出品のため図録未掲載)展示しました。

原は東京遊学時代に、東京音楽学校でヴァイオリンを学んでいたことがあり、帰郷してからも奏者として音楽会に出演するなどしています。こうしたことも含めて、美術の分野だけでなく当地近代の芸術・文化活動の高まりについては、今後も追跡を継続したいと思います。在野の知の巨人、南方熊楠が当地の生物や民俗の研究を基盤にして独自の学問を深めていた同じときに、若い芸術家たちが熱い行動を起こしていた田辺の状況はたいへん魅力的なものとして映ります。

地域とのつながり

現代の私たちと原とを結びつけるよすがとして、本展では携帯できるサイズの折り畳み式「田辺・白浜 原勝四郎ゆかりの地マップ」を作成し、各所

で配布しました(図4)。原が生きた時代から社会も町の様子も随分と変化しましたが、作品に描かれた海や山を、原と同じ地点に立って眺めたときに受ける、風や光も含めたその地からの感興は、おそらく当時から今まで変わりのないものでしょう。作品の生まれたところで、そこに表現された世界を五感で感じることが、原の芸術にさらに近づくことになるはずです。当館はまさにこの「ゆかりの地マップ」エリアの中にあり、展覧会を見た後でも、十分にその地へ行ってみるのが可能な場所に位置しています。実際に足を運ばれた方からの感想を会期中に聞くこともしばしばあり、嬉しい反応でした。

この追体験を、会期中の10月21日(土)に、本展の記念ワークショップ「原勝四郎ゆかりの地をめぐる」*としても実施しました。応募いただいた方々とスタッフ20名余りが当館に集合して作品を鑑賞した後、原が45歳から78歳で亡くなるまでの後半生を過ごした白浜にバスで移動し、最初に居を定め、繰り返し描いた網不知の港(図5)から、1946(昭和21)年の昭和南海地震で被災した後、仮住まいを経て終の棲家となった阪田の町営住宅付近や、戦後の風景画の特徴的なモチーフとなった江津良の海岸(図6)などを周回しました。当日は白浜町教育委員会の佐藤純一さんに講師を務めていただき、各所で当時からの変化や、地理的な特徴などについて解説を受けました(図7)。

白浜のランドマークとなっている白砂のひろがる白良浜や、国の名勝に指定されている高嶋(円月島)にも赴きましたが、地域の歴史や地理などを知り、描かれた実際の場所を見ることによって、原の描いた作品や生きた時代をより身近に感じていただけたと思います。当日は風が強く、曇りがちでしたが、雲間からのぞく太陽に、原の作品に見られる明るく暖かい光を感じることもできました。地域の魅力を改めて発見する、本当に楽しく有意義な機会となりました。

展示されている作品に接する今と、作品の生まれた過去、そして作品に表現されている世界と、美術館の外の環境とをつなげてゆく試みを、これからも当館の活動の中で続けてゆきたいと思います。今回の展覧会の経験は、そのための多くのことを学ぶ機会でもありました。

(田辺市立美術館・三谷渉)

* 記念ワークショップ「原勝四郎ゆかりの地をめぐる」、10月21日(土)、実施:運営:NPO法人 和歌山芸術文化支援協会(wacss)



図6 江津良の風景



図7 ワークショップの様子

生命が響き合うところ： 原勝四郎展 南海の光を描く



図1 《画工像》1932年 油彩、厚紙 当館蔵

当館と田辺市立美術館で、原勝四郎の50年ぶりの大規模な回顧展が開かれました。半世紀が過ぎれば、原と知り合い、その人柄に魅了された人より、作品から原の精神に触れる人の割合が多くなっているでしょう。今回、原の作品は、新しく原を知ることになる方たちの心に触れることができましたでしょうか。

原には驚くような逸話が多く、とくに紀南で生まれ育つとそれらをしばしば聞く機会があり、私個人は、原が実在しない物語の主人公であるかのような感じを持っていました。物語はその人の面影を鮮やかに伝えますが、反対に時の流れとともにその人を語る言葉が、現実感を失うときも来るのではないかと恐れてもいました。

そんなことはないと思えるようになったのは、実際に作品を見てからです。作品を見ると、それを描いた画家が実在した、ということがはっきりと感じられるようになりました。はじめてそれを実感させたのは、当館蔵の《画工像》(図1)でした。まず、筆の動きに滞りがなく、画家が描いているところが見えるような気がしました。そして、なにより色彩が美しいことに驚きました。この作品は原の作品の中では大きい方で、1932(昭和7)年の第19回二科展出品作です。褐色の壁の前にいる原の自画像で、シャツの青、上着のオークルが響き合い、唇のオレンジ色が鮮やかに映えています。塗り残しの白い下地が画面にすっきりとした空気が通うかのような余地を与え、太い筆で大胆に描かれていながら、無計画に絵具を重ねて画面を濁らせていないことが奇跡のように感じられました。

当館は、郷土の作家の作品を収集し、研究することを使命のひとつとしています。田辺に生まれ、田辺と白浜で制作を続けた原勝四郎の作品も、現在油彩画31点を所蔵し、お預かりしている作品も38点あります。これだけでも、小さな展覧会が企画できます。実際に、2009(平成21)年にもそれらを中心とした展覧会を開催しました。

このときにはまず全ての額を開けることから展示の準備がはじまりました。作品の状態を調査することと、撮影が必要だったからです。私はこのときは作業の手伝いで、釘付けされた額、錆びたネジなどをどうやって外そうかと困りながら、様々な状態の作品を扱いました。撮影の後は額装業者と、額のなかで作品を安定させるためにスペーサー(詰め物)を入れ、長い間に曇ったガラスを磨き、手元にある資材でできるかぎりの手当てをしました。

そうして手に入ったのは、額を開ける技術と額を閉じる技術だけではな

く、作品に触れ、もつとも間近で作品を見るというめったにない経験です。今回の展覧会でも、再撮影のためにまたしても開けて、閉じるという作業をしました。さらに今回は、拝借した水彩画の額装も手がけることができました。1914(大正3)年から1915(大正4)年に描かれた初期の水彩画が田辺市立美術館と白浜町から出品されました(図2・3)。知られているうちでもっとも早い作例である1909(明治39)年の《木槿》(図4)とともに、瑞々しくまた闊達な描写に惹かれました。保存状態がよく、今描かれたばかりにさえ見える鮮やかさに目が覚める思いがして、フランスへ渡る前、20歳代の原の若さと重ねあわせて作品を見ていました。

このような、作品に直接触れて心を動かされた経験を人と共有したために、作業をしているのかもしれない。しかし、手で触れているからこそ、それだけが作品に近づく方法ではないとも実感します。展示室で作品を見ることから、図版などからよりも多くのものを得られるのです。

たとえば、カタログの図版は資料として役に立つように、できるだけフラットに撮影した写真を使い、作品の部分だけを切りぬいて掲載することが多いのですが、展示室で見ると作品には絵具の凸凹があり、用紙のざらつき、好ましくなくても画面の反射など、図版に比べるとより多くの情報を見出すことができます。展示室の空間を含めて、経験できる現実には書物のページ上で図版を見るより格段に豊かです。

とくに原の作品の場合は、額縁も原の自作である場合があります。今回の展覧会でも、もとの額がそのまま残されている作品があり、展示会場の親密な雰囲気醸し出す一つの要素になっていました。原の自作の額は、決して端正な仕上がりではないものの、原の絵画に見られる、大きく速さがあり、ときに粗放にさえ見えながら対象を確実に把握する伸びやかな筆触に通じる雰囲気を持っています。

夫人の回想によると「額縁は全部手製だった」「自分の絵は自作の額でないと絶対合わぬと固く信じて、暇があれば、せっせと木彫りの縁を作っていた」*1とあります。また原自身も「朝はおつむがよいので絵を描く。午後はしばらく昼寝をする。其の後は額縁を作ったり、釣りを楽しんだりする。興が湧けば、ヴァイオリンを弾いて楽しむ時もある」*2と語っています。原の日常には、いつも絵を描くこととともに額縁を作る時間がありました。ここでは、円熟期の作風が魅力的な作品を自作の額とともにご紹介します(図5・6)。



図2 《風景》1914年 水彩、紙 田辺市立美術館蔵



図3 《風景》1915年 水彩、紙 田辺市立美術館蔵

原が額を自作したのは、彼が生活した田辺や白浜には彼が満足できる額装ができる業者はいなかったためであり、高価な額縁をたくさんは買えないという経済的な理由もあったでしょう。しかし、なにより原にとって画家の絵筆で塗り重ねられた絵具層だけが「作品」ではなく額縁もまた作品の一部で、自らの絵の世界の全体を自らの手で完成させるため重要な要素であったのだと思います。それは、他人まかせにしないで作品のすべてを自ら手がけようとした、画家の真摯な姿勢のあらわれともとらえられます。作品とともに残された自作の額は、そうした彼の制作と生活が一致した日常を示し、逸話の数々よりさらに力をもって画家をリアルな存在として感じさせるものです。作品は彼岸と此岸をつなぎ、私たちは作品を通して会ったことのない画家とさえ対面できます。作品の中に作家の生命は息づいており、展覧会場は、画家の生命と作品を見る私たちの生命が響き合う場としての働きも持っているのではないかと思います。(植野比佐見)

- *1 原厚子『原勝四郎の思い出』(私家版、1979年)より、「税金」pp.134-154、および「あの人・この人」pp.224-229。
- *2 『原勝四郎画集』(原勝四郎画集刊行会、1973年)より、目良湛一郎「原先生とその周辺」pp.173-179。

*図1から図6まで作者はすべて原勝四郎



図5 《海岸風景》1952年 油彩、板 個人蔵



図6 《海辺》1954年 油彩、キャンバス 個人蔵